

# 日本十進分類法(NDC)新訂7版から 新訂9版への変更について

レファレンス課 城 省 自  
収書・整理課 井 村 徹

近畿大学中央図書館では、図書の分類に日本十進分類法新訂7版を採用していました。その他、伝記、作家研究などに一部本学独自の「近畿大学分類法」を採用している図書もありましたが、平成16年4月から新訂9版に変更することになりました。

## 分類変更の必要性

中央図書館が採用する日本十進分類法は日本図書館協会が管理する分類法であり、わが国の公共図書館の99%、大学図書館の80%が採用している標準的な分類法です。日本十進分類法は1929年に第1版が発表されて以来、社会や学問領域の変化に応じて9回の改訂が行われています。日本十進分類法がモデルとした「デューイ十進分類法」(アメリカの大部分の公共図書館が利用)は22回の改訂が行われています。

日本十進分類法 改訂年

版	出版年
第1版	1929
第2版	1931
第3版	1935
第4版	1939
第5版	1942
第6版	1950
第7版	1961
第8版	1978
第9版	1995
第10版	2008?

図書の分類は、図書の配置場所を決める住所のような役割を果たす「書架分類の要素」

と主題検索のアクセスポイントとしての「書誌分類の要素」があります。このような役割を果たす図書の分類は全蔵書に同じ分類表を適用するのが望ましいのですが、社会の進展により、分類できない新しい分野が出現します。中央図書館では近年の情報科学やコンピュータ関係など新しい学問の創設に対し、日本十進分類法新訂7版に部分的な修正を加えながら新訂7版を堅持してきました。しかし、日本十進分類法新訂7版は1961年に制定されたもので40年以上を経過しており、現代の知識体系を新訂7版に適合させることに限界を感じていました。以上のような理由により日本十進分類法新訂7版から新訂9版への変更をすることにしました。

## 分類変更作業について

日本十進分類法が改訂された場合、改訂をどうするかは図書館にとって大きな問題です。古い版で分類してきた図書を新しい版で分類し直すのは大変な作業です。全蔵書の分類を変える方法は、分類体系の一元化できるというメリットがありますが作業量が膨大です。手っ取り早く新規受入図書だけに対応する方法は、現蔵書との整合性に問題が生じます。今回の中央図書館の分類変更は開架図書の新分野、利用頻度の高い分野など特に利用上変更するのが好ましい分野に限って実施することにしました。また、新規に受け入れる図書はすべて新しい版を使うことにしました。

分類変更作業を円滑に進めるため「9版使用ワーキンググループ」を組織し「7版・9版分類対応表」を作成しました。これを基に分類変更の必要冊数を調べたところ分類変更

の必要な開架図書は約20,000冊であることが分かりました。特に、549.92から007に変更となる情報・コンピュータ関係の図書が膨大であることも分かりました。これに伴う図書の移動は大変な作業でしたが、予め書架の図書配分を決めそれに従って閲覧係の人が作業を行い3月の1ヶ月間でほぼ再配置ができるよう書架の整理を終え、閉館をすることなく新学期を迎えることができました。

分類変更を利用者に知らせる方法としては、図書館だより、図書館入り口の掲示、ホームページでの案内、書架に「・・・を見よ」「・・・をも見よ」などの貼り紙で対応しました。閲覧課の人には、利用者が混乱しないよう指導してもらいました。

### 評価・将来への展望

分類変更作業を開始して6ヶ月が過ぎますが大きな混乱はありません。現在、情報科学、コンピュータ関係を中心に20,000冊の4分の1、5,000冊の変更を終えています。

変更に踏み切ってよかった点として、(1)開架書架において、情報科学、コンピュータ関係の図書が書架上に体系的に配列されたので、同じ主題、または類似の主題がまとまっており調べるのがとても便利になりました。(2)第9版は現在の学問領域と対応しているため分類がやり易くなっています。(3)本学独自の「近畿大学分類法」を標準的な日本十進分類法に改めることができました。(4)第9版の分類は、国内で出版される図書をほぼ網羅している国立国会図書館のJAPAN/MARCデータに付与されているため図書の分類の参考になっています。

問題点は、まだ分類変更をしていない閉架書庫の図書です。日本十進分類法の改訂に際して、分類表の基本構造に関わる変化は極力避け、前版との接続性を維持し現場の混乱をもたらさないよう配慮されています。このため、古い版で分類してきた図書を新しい版で分類をし直さない図書館は多くあります。現在、中央図書館の閉架書庫もこの状態にあり、全体

からすると僅かですが同一分野の図書であっても分類番号の異なる資料や同一分野や類似分野の図書でも連続して配架されていない場所があります。この対策として書架に案内表示をしたり、OPAC検索により請求記号と配架場所を確認するよう指導しています。

OPACやインターネットを通じて他の図書館の所蔵検索が一般化した現在では主題分析のアクセスポイントとなる分類は重要だと分かりながらも、多くの図書館で費用対効果の問題が解決できず、「キーワードなど他のアクセスポイントで検索できるので分類変更(遡及処理)を遡って行わない」という考えに落ち着きつつあります。

図書の分類は各図書館の事情に合わせるようになっており、日本十進分類法に拘束されるものではありません。図書館によっては日本十進分類法の3桁だけを使うところがあったり、逆に特定分野の資料が多い場合は独自の展開をする図書館もあります。大学図書館の中には一度採用した分類表は変更しないこととし現在も第6版を使用している図書館もあります。

今回の分類変更作業の結果、開架閲覧室の図書は時代に対応した分類で配列されたため利用者にとって本が探しやすくなっています。新訂7版(1961年改定)から新訂9版(1995年改定)への変更であり新訂8版(1978年改定)を飛ばしているため効果が目立ちます。2008年に日本十進分類法改訂版(新訂第10版)の発行が予定されています。時代は急速に動いています。図書の配列は「その時代にその図書館を利用する人」の感覚で配列されなければなりません。そのためには時代に対応した新しい分類表(新訂第10版)を採用することは大きな意味があります。

時間の経過とともに変更作業の苦しかった部分だけが残り、新訂10版への変更には消極的にならないことを切望します。

[2004.10.5記]